

國寶瑞龍寺新能

第四十回記念

# 記念 高岡薪能

國寶 高岡山 瑞龍寺境內

(雨天の場合・富山県高岡文化ホール)

海人 広島克榮

萩大名

炭哲男

金井 雄資  
秀祥

小鍛冶

白頭

シテ  
大坪喜美雄

ワキヅレ 北島 公之



## 【主催】高岡能楽会

《共催》高岡市  
高岡市教育委員会  
北日本新聞社  
富山テレビ放送株式会社

（後援）富山県  
国宝瑞龍寺保存会  
砺波市教育委員会  
南砺市教育委員会  
水見市教育委員会  
射水市教育委員会  
小矢部市教育委員会

【入場料】前売り3,000円

(当月 3,500円)

**小・中・高校生 お上で 同伴者 無料**

藝術文化振興基金助成事業

能

## 小鍛治（こかじ）

裏にはご神体が弟子を勤めた証の

「小狐」の銘という、ふたつの銘が刻まれた名剣「小狐丸」が出来上がったのです。明神は小狐丸を勅使に捧げた後、雲に乗って稻荷の峯に帰つていきました。

前シテ 少年

後シテ 稲荷明神

ワキ 三條小鍛治宗近

ワキヅレ 勅使、橘道成

アイ 宗近の下人

（末社の神）



▼みどころ

「小鍛治」は、一曲の展開が素早く、非常に変化に富み、前半、後半ともに見どころの多い人気の曲です。前半では宗近の前に現れた不思議な少

夢のお告げを受けた一条天皇（980～1011）の命により、勅使の橘道成は、刀匠として名高い三條小鍛治宗近（さんじょうのこかじむねちか）のもとを訪れ、剣を打つよう命じます。宗近は、自分と同様の力を持つた相槌を打つ者がいないために打ち切れません。進退きわまつた宗近は、氏神の稻荷明神に助けを求めて参詣します。そこで宗近は、不思議な少年に声をかけられます。少年は、剣の威徳を称える中国の故事や日本武尊（やまとたけるのみこと）の物語を語つて宗近を励まし、相槌を勤めようと約束して稻荷山に消えていきました。家に帰った宗近が身支度をすませて鍛冶壇に上がり、礼拝していると稻荷明神のご神体が狐の精靈の姿で現れ、「相槌を勤める」と告げます。先ほどの少年は、稻荷明神の化身だったのです。明神の相槌を得た宗近は、無事に剣を鍛え上げました。こうして表には「小鍛治宗近」の銘、

剣を抜いて草をなぎ払い、炎を敵に返して退ける名場面の語りと動きの変化が面白く、後半は相槌を勤める明神と宗近が剣を鍛えるクライマックスへ向かつてどんどん運んでいくところに妙味があります。

きびきびした動きと爽快な謡は見る人を飽きさせません。演者の技の切れや謡の力を素直に楽しめる曲で、その娛樂性の高さからでしょう

か、歌舞伎や文楽にも採り入れられ、親しまれています。

（The能.comより）

## 萩大名（はぎだいみょう）

シテ 大名

アド 太郎冠者

訴訟事で都に長く滞在していた遠国の大名が帰国前にひと遊山しようと太郎冠者に行き先を相談すると、東山の清水觀世音に行くついでに茶屋の萩庭を見に行つてはどうかと勧められます。ただし、その茶屋の亭主は客に当座を求めるとのこと。風流の道に嗜い大名は「当座……とは何のことじゃ?」と怪訝そう。つまりは萩を読み込んだ和歌を作るということなのですが、そんな難しいことが必要なら茶屋には行かぬと大名は不服顔。そこで太郎冠者があらかじめ

七重八重九重とこそ思ひしに  
十重咲き出づる萩の花かな

という歌を用意したのですが、これすらも長過ぎて大名には覚えられません。それならと知恵者の太郎冠者は扇をとりだし、開きながら扇の骨の数で「七重八重九重……」と示します。最後の「萩の花かな」はどうする?といいう大名に、太郎冠者は自分の脛（はぎすね）を見せることにしました。サインが決まって準備万端の二人は萩の庭を訪れます。庭を褒めようとする大名は白い備後砂（名物らしい）を豊後砂と聞き間違えたり干し飯を見るようじやと即物的。庭石を見れば打ち欠いて火打石にしたらよかろう、ですし、白梅（はくばい）という言葉も知りません。その都度、偉いはずの大名が軽輩の太郎冠者に「シーツ!」と制され、たしなめられるのがおかしみを呼び

狂言

ます。神妙な顔をする大名が、また庭の奥をためつすがめつする様子に見ている方も「また何か見つけたのか?」とハラハラしてしまいます。「あのつーと向こうにかーつと赤う見ゆるは何じや?」と問うて、これが萩の花。またしても、白砂の上に赤い萩が散つたところが赤飯のようだと言つて太郎冠者に怒られるものの、亭主は喜んで歌を所望します。ここで太郎冠者との会話。「今のお聞きなされましたか?」「何を?」「当座」「どうぞ?」「(イラついて)歌!歌!」これでハッとしたと氣付いた大名は自分も歌好きだと言いはりますが、せつかくのサインを見ても「七重八重」と言うべきところを見たままに「七本八本」とやつて、「今は違いました」とその都度訂正する始末。とうとうキレた太郎冠者は「あのような人には恥を与えたがようござる」と帰つてしましました。何とか十重咲き出づるまでは進んでいた大名ですが、最後の七文字萩の花かなが出てきません。ここまでを詠み直して最後はどうなるのかとわくわくしている亭主を前に、大名は立ち上がりて微妙な間、そしていきなり「……さらば」と帰ろうとするので亭主は驚いて引き止め、ついには大名を引き回して、後を言わねば帰さないと迫ります。万事窮した大名は苦し紛れに「思い出した!十重咲き出づる、太郎冠者が向こうずね!」とやつて亭主に「あのやくたいもない!とつとお行きやれ」と怒られて、しおれた様子で「面目もおりない」。

重々しい大名出立でありながら太郎冠者がないければ何もできない大名の愚かしさが笑いのポイントですが、この大名にはそれなりの風格と田舎くささ、そして邪氣のない大らかな明るさがあつて、憎めません。太郎冠者とのコンビがまるでボケとツッコミのようないな、楽しい一番です。